



内田百閒と雑誌『東亜之光』（研究ノート）

朱，信樺

(Citation)

國文論叢別冊, 1:56-65

(Issue Date)

2023-09-30

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100483234>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100483234>



内田百閒と雑誌『東亜之光』

朱 信 樺

一 はじめに

内田百閒の本格的な文壇デビューは、一九二一年一月『新小説』に発表した「冥途」等六篇による。だが、近年の研究では、『新小説』以前に雑誌『東亜之光』に小品を発表したことも注目されはじめている。連作『冥途』（稲門堂書店、一九二二・三）については、三作のオリジナル版が一九一七年一月『東亜之光』に掲載されている。表題作「冥途」は時制を中心とした改稿の上で、「山東京傳」は改稿なくそのまま、「道連」は「土手」と改題され後半を大幅に改稿したものが、それぞれ『新小説』に掲載された。

連作『冥途』を収める旧『内田百閒全集』第一巻（講談社、一九七一・一〇）には『東亜之光』発表作は収録されていないが、高橋義孝は本巻の解題において、一九二二年一月二十三日付の『読売新聞』日曜付録版に組まれた「今年は何を書くか」を紹介している。百閒はここで「冥途」の中の二つは「度古い」「東亜之光」に出したことがあります。読んでくれた人は殆どなかった様ですが、それでも後で厭な氣がしました」と、本誌に言及した。¹⁾追っ

て『新輯内田百閒全集』第一巻（福武書店、一九八六・一一）では『東亜之光』版「冥途」等三篇が収録された。また、坂口周は「冥途」を例に本誌と百閒との関係に言及し、「文体の巧拙だけ比べれば」本誌掲載版よりも『新小説』版のほうに「軍配が上が」ったと指摘している。²⁾

後年の百閒は、『東亜之光』に作品を掲載したことに関して積極的な言及は避けているようだが、掲載媒体の知名度のほか、雑誌の性質にも深く関わると思われる。『東亜之光』は、スピリチュアリズムや異常心理に関する言説の発信媒体としての性格の色濃い雑誌であり、百閒にしてみれば、作家デビューの舞台としては文学雑誌である『新小説』の方がふさわしかったと言えるからである。

一九〇六年一月、東京帝大哲学科初の日本人教授として知られる井上哲次郎の主宰により創刊された『東亜之光』（東亜協会、一九〇六・一―一九二四・四）は、催眠術や霊術を日本に紹介する窓口となった雑誌である。たとえば一九一〇年九月号には、のちに念写実験で東京帝大から追放された福来友吉による「精神可能

性と人格」が掲載されている。福来はここで、「催眠術を應用すれば段々と精神で」肉体を「支配することが出来」、「血液を出したり止めたりすること」さえできると説いている。この他にもスピリチュアリズムに関連する論考としては、須貝太郎「千里眼的事實に就て」(一九二一・一〇)、速水混「静坐に伴ふ無意識運動について」(一九二二・一〇)等が挙げられる。また、神保三郎「精神分析学」(一九二二・一一)では、フロイト (Josef Breuer) やフロイド (Sigmund Freud) に言及しながら催眠と潜在意識についての考察が行われている。

先述のように、内田百閒が本誌に掲載した作品のひとつが、「山東京傳」である。近年、松原大介は、百閒が本作の創作に際して参照したと見られる京伝の原典についての考証を行なっている。これに先駆け、なぜ本作が実在人物である京伝の名を題名に戴いたかについては、野口武彦が示唆的な指摘をしている。野口によれば、作中の「私」が替える丸薬とは、京伝が副業として製造していた「読書丸」である。この指摘に加えて言えば、一例として、京伝の『櫻姫全傳曙草紙』といった書籍の巻末広告の記載によると、この薬はまさに神経衰弱を治療するためのものであった。この点に、百閒の多くの初期作品に底流する神経衰弱のモチーフが垣間見られるだろう。百閒が初期作品の掲載媒体に『東亜之光』を選んだのは、神経衰弱をはじめとした精神病理についての言説を本誌が頻繁に取り上げたことと無関係ではないのである。

杉山亮は、『東亜之光』の発行母体となった「東亜協会」について詳しい調査を行なっている。とくに注目されるのは、出版の他に、「東亜協会」のもう一つの主要事業である講演会・講習会の開

催動向を調査している点である。⁷⁾これによって、「東亜協会」の会員には夏目漱石や鈴木三重吉ら文学者のほかにも、東京帝大文科の教授や講師が名を連ねたが、なかでも福来が積極的に開講していたことが明らかにされている。また、雑誌の発行形態や、井上が目的とした青年の修養という問題に関しては、荒川大輝の論文に詳しい。⁸⁾

だが、井上哲次郎の活動の一環とされる『東亜之光』は、専らこれら歴史的、とくに学知史的な観点から取り上げられており、その文芸欄についての検討は進んでいない。本誌に「想華」と名付けられる文芸欄が設けられたのは、一九〇八年一月のことであった。本稿では「想華」、そして一九一四年一月号より「想華」の後継として設けられた文芸欄「文苑」を中心とした文学関連の記事に注目し、内田百閒の文学活動の隠された揺籃として『東亜之光』を位置づけたい。

二 大学時代の百閒と『東亜之光』

井上哲次郎が『東亜之光』を創刊した背景には、荒川大輝が指摘するとおり、日露戦争後の青年の「精神上の問題」が「以前よりもさらに解決の必要性」を高めたということがあった。誌上では「青年の煩悶」を主軸に、さまざまなテーマが展開された。たとえば、一九〇八年の刊行号を眺めてみると、思想及び宗教関連の論文が多く掲載されており、誌面はおおまかに三つの部分から構成されている。世論・外国文学関連の論文、文芸欄にあたる「想華」、および「雑俎」との三つである。論文としては、西田幾多郎による「倫理學說」(一九〇八・三、四、六・八)のほか、森卷吉

の「西歐文學に見はれたる道德的要素」(一九〇八・二、六)が号を跨いで連載されている。

吉永進一の調査によると、「催眠術」を題名として日本国内で刊行された単行本の数は、一九〇二年の一冊から、その翌年には一三冊に伸びたという。一九〇三年をはじめとする三年間が流行のピークだったが、その後一九一〇年までの間も、毎年八冊から一〇冊前後が出版されている。このように、日露戦争後、催眠術を中心とした心靈的なものが知識人の間にも浸透する。

たとえば、「想華」の執筆者として、浅野馮虚の筆名で発表された随筆「牛乳の屠蘇」(一九〇八・四)を皮切りに、浅野和三郎が登場する。後年には大本教入信で問題を巻き起こした浅野もまた、明治三〇年代後半のオカルトブームのなかで、催眠術に傾倒した知識人のひとりである。一九一六年、心靈研究に専念するため海軍機関学校を退官した浅野は、本誌の同年四月号に「沙翁談片」を発表した。この文章の冒頭には、「私が死去したのは忘れもせえぬ一六一六年四月廿三日で、指折り數ふれば今年今月は正に三百年に当たります。で、その紀念の為に『東亜之光』誌上にも私に関する記事が掲げられますとやら、(略)身に餘る光榮と厚く御禮を申上げる次第に御座ります」とある。シェイクスピアの降霊を思わせる文章であり、一九二〇年代に入った後に浅野が関心を寄せた憑依は、早くもこの時期から始まっていた。

帝大哲学科の機関誌という性質を持つ本誌には、仏教学に関わる内容も数多く見られる。浄土真宗大谷派の僧であり、仏教研究者でもある常盤大定は、創刊当初より「佛教文學に就きて」(一九〇八・三)、「佛教文學」(一九〇八・四／六)などを発表してい

る。日本学会の講演筆記である「佛教文學」は、出家したものの欲情に心を奪われ、「釜の内」で「煮らなければならぬ運命」を辿った弟子難陀について説き、釋迦牟尼の言葉を「因縁文學」の一例として取り上げている。「釋迦牟尼が、何か催眠術でもかけたものであらうといふやうに見てもこれまた一つの解釋になりませう」と、常盤はこの因縁話を催眠術と結びつけている。これまで百聞の文章の中では、宗教関連の記述はそれほど見当たらないが、本誌に多く掲載された仏教関連の論文が参照先となったと考えられる。たとえば「道連」を一瞥すると、後半では「瑜伽」や「尼」といった宗教的な要素が主題とされている。これらには、「東亜之光」が提供した仏教に関わる知識が反映されていると考えられる。

『東亜之光』所収の「彙報」には、帝大文科の講義科目や、当該年度の卒業論文題目が掲載されている。一九一〇年に入学した百聞に関しては、一九一四年六月号に「ヘルマン・ゾーデルマン作『フラウウルゲ』に関する研究／獨逸文學 内田榮進¹²⁾」との記載を確認することができる。この論文の内容は定かでないが、ゾーデルマンの『フラウ・ゾルゲ』(現訳『憂愁夫人』¹³⁾)は、ドイツ自然主義文學の流派に属する一作であり、ゾーデルマンを代表する長編小説である。没落した家庭に生まれた主人公のパウルは、一家を支えようとするものの、憂愁夫人に呪われ不幸が続く。父親の犯罪を止めさせるべくわが家に放火し、出獄したパウルは、自己犠牲によって憂愁夫人の呪いから解き離れ、恋人と結ばれる、といった筋立ての作品である。訳者の相良守峯によれば、本作は、「多分に作者自身の少年時代の日々の自伝的要素が織り込まれ」ており、「自然主義的手法」により「少年心理とその浪漫的な心情を巧

みに描き出している」とされる⁽¹⁴⁾。

卒業論文の提出後、百間は大学院に進学した。一九一四年一月号の「彙報」では、「文科大学大学院入學」の「文學科」の欄に、「ダス・ユング・ドイツランド／文學士 内田築造」とある。この題目は青年ドイツをテーマとするものであるが、山本一生が指摘する通り、当時の百間は「毎日何もしない」と本人も述べるような生活ぶりだった。山本も参照する一九一五年の「駒込曙町」の記述によれば、百間は「大學院の研究題目は、うつかりすると、何と云ふのであつたか忘れてゐさうな氣がする」ほど学究から遠ざかつており、「雜誌が何かに出てゐる他人の、讀み度くもない論文の表題の様な氣がする計り」であつたという⁽¹⁵⁾。

『東亞之光』からは、百間が敬遠していたという当時の文科大学における学知の動向が窺える。一九一〇年代にブームを起こした心理学に関しては、ヒステリー研究で知られるフロイトや精神分析の祖であるフロイトを論じた記事が本誌に掲載されていることは先述したが、これらより少し時期の早いドイツの心理学者であるヴィルヘルム・マクシミリアン・ヴンドの実験心理学に関わる論文も見られる。

一九一三年に刊行された各巻を縦覧すれば、高橋穰「心理學の組織難」(三月)、桑田芳蔵「所謂實驗心理哲學分離問題に就いて」(八月)などの論文が示すように、アカデミズムでは精神分析よりも実証的な実験心理学が主流であつたと推察できる。速水滉による「靜座に伴ふ無意運動に就て」(一〇月)では、「フロイド一流の抑壓觀念は自分には腑に落ち兼ねぬ點がある」という記述が見られ、フロイト精神分析が台頭してきことを伺わせる。

独文学に関わる論文の担い手としては、のちに百間もその授業を受講した青木昌吉が、本誌に「獨逸文學研究書目」(一九一〇・九)をはじめ、「日獨熟語の比較」(一九一一・八)、「獨逸文學の特徴」(一九一二・三・四)「ゲテエーの小説」(一九一四・五／七)、「小説の上から見た獨逸の婦人」(一九一五・五)などの論文を掲載し、ドイツの言語、文学、文化を幅広く論じている。独文学者の青木昌吉は、ゲテ協会会長の会長を務め、『ファウスト註解』(東京郁文堂、一九三九・五)を著した人物である。なお後年、百間は青木に関する随想「青木先生」を著している。これによれば、後年、百間は法政大学のドイツ語の主任になった際、青木を講師として迎えたという⁽¹⁶⁾。さらに付言すれば、法政大学の演劇大会に際して、百間は学生に戯曲「ファウスト」の指導を行ったこともあった。

続いて独文学関連の文章を綴つたのが、主にゲテを専門とした山岸光宣である。独文学者の山岸は、ゲテの生涯とその作品の紹介を記した『ゲテ』(アルス、一九二六・五)などの著作がある。本誌の一九一一年九月号に、山岸は「獨逸文藝雜誌」を発表した。この論文では、一九〇九年以降彼が洋行した際に目にしたドイツの戯曲について語つた。ここで山岸は、ゾーダーマンについて「藝術的良心と云ふよりも時好に投じて一つ世間の喝采を博して見やうといふ野心から作をする傾向がある」と指摘し、「ヨハンニス・フォイヤー」は「自然主義を模倣した」だけの「無難」な作、「ソドムの最後」は「佛蘭西のサルドウやオージェの家庭悲劇を學んで到らないもの」であると批判した。一九一三年一〇月号では、山岸は再びゾーダーマンの戯曲『評判(Der gute Ruf)』を

取り上げ、「題材を現實生活の中より取り来る」点において、「自然主義の鋭鋒を包んで、群集を誘うて次第に新藝術に近づかした」作品と評した。のちに山岸は『獨逸文學概観』（新潮社、一九三六・二）において、ズーダーマンを劇作家のハウプトマンと並列し、「既成の社會、道德、信仰に反抗を試みる」巨匠として評価した。

百閒の初期テキストが、同時代の心靈ブームや精神分析的な知をどの程度汲んでいるかについては、大いに検討の余地がある。『東亜之光』に着目すると、本誌に掲載されたドイツを中心とする実験心理学や精神分析学の教養がその参照先の一つである可能性が浮上してくるだろう。また、卒業論文のテーマとした作家ズーターマンや、そのほかのドイツ語の文学、文化に関わる紹介も、百閒の教養形成に影響を与えたと考えられる。

三 百閒の掲載句

『新小説』に登場するまでの百閒の作品の発表媒体を一瞥すると、田山花袋が選者を務めた頃に中学生として投稿した『文章世界』、中学の校友会誌にあたる『鳥城』、そして『六高校友會誌』の三誌が主なものとして数えられる。中でも『六高校友會誌』は、のちに百閒が主催していた句会が主導権を握り、掲載作は俳句一色となったという。

『東亜之光』の文芸欄「想華」には、一九〇八年より志田素琴や大谷繞石の句作が掲載されたが、一九〇九年四月号以降は、俳句コーナーは繞石の選句の形で組まれるようになった。同年一月号より、繞石が文部省の外国人留学生としてイギリスに留学した

ことを契機に、素琴が選者となり、一九一七年まで殆ど素琴の独壇場となった。

志田素琴（義秀）は、第六高等学校で国文学を講じた、百閒の師にあたる俳人である。藤井紫影に師事し、芭蕉研究から出発した素琴について、成蹊高校および東大でその教えを受けた井本農一は、次のように述べている。

志田義秀先生は岡山の第六高等学校で内田栄造（百閒）に国語を教え、また志田素琴として俳句を教えた。百閒は俳句に熱中し他の学業を怠って、ほとんど落第するところであった。志田義秀先生は、東京帝国大学国文科で大須賀乙字の先輩であるが、一時期碧梧桐門の中塚一碧楼に共鳴し、「新傾向」の句を作ったり、評論を書いたりしたこともある。乙字は明治四十年頃の碧梧桐の新風に同調し、「新傾向」の名称は乙字の作ったところであるが、「新傾向」が過激化したとき敢然これを論難し、碧梧桐一派と袂を分つて古典復帰・自然推重を唱えた。志田義秀もまた新傾向の行き過ぎを憂え一碧楼から離れ乙字を左袒した。

右に言う「碧梧桐門の中塚一碧楼に共鳴し」、「新傾向」の句を作ったり、評論を書いたりした」一時期とは、追って詳しく見るように、『東亜之光』で辣腕を振るつた一九一二年前後を指す。碧梧桐門下の俳人の瓜生敏一によれば、素琴が一碧楼に接近したのは「わずかに一年くらいの短い期間」であったという¹⁹。一方、百閒は新傾向の中心にいた「（河東）碧梧桐、（喜谷）六花、（小沢）碧

童などと云ふ當時の錚錚たる諸氏」とは交流がなかったようだが、碧梧桐が選者を務めた「雑誌『日本及び日本人』の日本俳句欄は高等學校の時からいつでも愛誦していた」と回想している²⁰。六高時代の百間は志田素琴の影響を受け「新傾向」へ接近したものの、素琴自身はのちに新傾向と距離を置いた。

本誌に「百間」の名による俳句が志田素琴による選として最初に掲載されたのは、第六高等学校在学中の一九〇九年一月号である。以後、大学入学後の一九一〇年二月まで選出が続いており、「百間」の筆名で掲載された俳句は、左の一覧のとおりである。

後年、百間の俳句は村山古郷の編により『定本内田百間句集』（永田書店、一九七四・七）として集成された。のちにこれを底本とし、村山と平山三郎との共同編纂により、約三〇句の補遺を付け加える形で「俳句全作品季題別総覧」が『新輯内田百間全集』第十八巻（福武書店、一九八八・四）に収められた。これは現在辿れる範囲で唯一の百間の句作総覧である。なお、百間の生前に出版された俳句集には、『百鬼園俳句帖』（三笠書房、一九三四・七）と『百鬼園俳句』（青磁社、一九四三・一〇）の二冊がある。講談社版『内田百間全集』第二巻（一九七二・一二）の解説によると、一九三四年一〇月『無絃琴』から一九三九年に出版された『鬼苑横談』までの五冊の新著本巻末に、『百鬼園俳句帖』の拾遺が附録されている。初期俳句に関しては、『内田百間全集』第五巻（一九七二・六）が刊行媒体を詳細にまとめているため、左の一覧では「俳句全作品季題別総覧」を参照しつつ、『内田百間全集』第五巻に記された掲載媒体を各句に付記する。なお、これらの刊本

のいずれにも収録されていない『東亜之光』掲載作品には☆印をつけた。また、本誌が初出と見られる句には★をつけた。

（一九〇九年二月）

肥ためす畑潰れいふ秋の雨

（苦洪会句稿、一九〇九年二月二〇日発行『六高校友會誌』掲載）

瘧に利く葉便りや秋の風

（六高俳句会九月例会句稿、一九〇九年二月二〇日発行『六高校友會誌』掲載）

欠伸すれば頸骨鳴りぬ秋の風

（六高俳句会九月例会句稿、一九〇九年二月二〇日発行『六高校友會誌』掲載。改作「欠伸して鳴る頰骨や秋の風」、『百鬼園俳句』所収）

（一九〇九年二月）

無からんとす俚歌憂ひ聞く芭蕉村

（苦洪会句稿、一九〇九年二月二〇日発行『六高校友會誌』掲載）

此郷の色壁や旅しぐれつ、

（苦洪会句稿、一九〇九年二月二〇日発行『六高校友會誌』掲載、表記改変「この郷の色壁や旅しぐれつ、」、『百鬼園俳句帖』所収）

返り花古綱焚くにぼと燃えて

（表記は改変「歸り花古綱焚くにぼと燃えて」、同年『六高校友會誌』掲載、巻号未詳）

〔一九一〇年一月〕

朱肉煮て油かへすも日短き

（偶會句稿、表記改変「朱肉煮て油返すも日短き」、一九〇九年十二月二日発行『六高校友會誌』掲載、『百鬼園俳句帖』所収）

次ぎ織ろに解く機も日短かけれ☆

鏝の焼け見る頬ほてり木枯す

（六高俳句会九月例会句稿「鏝の焼け試る頬ほてり凜す」を改作、上記を一九〇九年十二月二日発行『六高校友會誌』掲載）

〔一九一〇年二月〕

晝灯して黄焰す枯野家☆

沖は鮪の風なり枯野井水増す☆

土焦けは板焼きつらん冬山家☆

〔一九一〇年三月〕

漆椀はちく雫や水温む

（同年『六高校友會誌』掲載、巻号未詳）

潮鳴りの夜を織る裾の冴返る☆

金泥を煉る匏や冴え返るなり★

（表記改変「金泥を練る匏や冴え返るなり」、『日本及日本人』

一九一〇年六月号掲載）

欄間明りに浮く繪天井冴え返る☆

〔一九一〇年五月〕

手水石模様に乾く蝶の晝☆

張絹をすべる雫やとぶ胡蝶★

（表記改変「張板をすべる雫やとぶ胡蝶」、同年『六高校友會誌』掲載、巻号未詳、『百鬼園俳句帖』所収）

雪解くる國寺々の派に縋れて☆

行く春をあと鳴る箴の啜るよに☆

髪毛星ふる尾に焼野火の這へる☆

〔一九一〇年十一月〕

亂る脉に幹抱けば柳晴れを散る☆

支那料理飽くと出口の柳散れり☆

檻の虎見てある腦に花火とゞろ★

（改作「檻の虎見てあれば晝花火とゞろ」、『百鬼園俳句帖』所収）

脱剥の毛吹けば花火空に咲けり☆

寄食はなれして残る氣に燈籠も☆

〔一九一〇年十二月〕

腐果の死蟲が甦る瞬名残る日や☆

上る衛森の落果の夜頻るを☆

焚火跡を打つ霰女と佇めば☆

夜の街を牛連れて霰灯に浴びし★

（改作「夜の町を牛牽く人に打つ霰」、『無絃琴』（拾遺）↓『百鬼園俳句帖』所収）

濤に死魚見し目秋風の夜の灯に☆

これらの句のなかでも特に注目に値するのは、いくつかの作品がのちに推敲されている点であろう。たとえば一九三四年刊行の『百鬼園俳句帖』には「檻の虎見てある腦に花火とゞろ」を改作し

たものと見られる「檻の虎見てあれば晝花火とゞろ」が収録されている。他にも、「欠伸して鳴る頬骨や秋の風」、「朱肉煮て油かへすも日短き」は、校友会誌、『東亜之光』を経て、一九四三年に出版された『百鬼園俳句』に再録されているが、推敲の跡が認められる。本誌に掲載された一九一〇年前後の作品が、二、三十年後の句集に改作の上で収められているのである。

四 素琴の新傾向批判

百閑と『東亜之光』との繋がりとは、第六高等学校時代の句作が掲載されたことから伺えるように、志田素琴がその仲介役を担った。素琴が河東碧梧桐門下の中塚一碧楼および新傾向俳句に接近した一時期を持つことはすでに述べた。瓜生敏一によると、一九一〇年前後の岡山には、百閑らが主催した六高の生徒を中心とする句会のほか、「吉備団子会」、「雑魚寝吟社」があり、一碧楼は玉島の「乱礁会」に参加していたが、「素琴は岡山にあるこうした俳句会に殆ど参加しなかったと見えて、それらの句会報には素琴の作品はほとんど見えていない」。だが素琴はまもなく、「一碧楼らが『試作』を出していることを知り、それを見して興味を覚え、自分自身これを試作するとともに、試作一派の作品をも『東亜之光』俳欄に掲載するに至った」という。なお同じく瓜生によれば、素琴が一碧楼の主宰する俳誌『試作』（のちに『第一作』と改題）にはじめて作品を発表したのは、一九一二年六月のことである。²¹

一九一二年七月号の「想華俳句」欄は、瓜生のいわゆる「試作一派」の作品を掲載し、表題も「試作」と銘打っている。ここに掲載された句を挙げれば、中塚直三（一碧楼）の「水でも飲まう

か、雑誌は買へないし蚊が鳴いて」「^ち嚴父のやうに短夜の机が光る」や、素琴の「ボブラ、ユーカリ、アカシヤ、クロバ、新しい夏」など、新しい季題を取り込んだものの、外来語を多用したものの、五七五の定型を度外視したものなど、いわゆる新傾向の作品が目立つ。

さらに素琴は『東亜之光』に、「本誌の俳欄の試作に就いて」（一九一二・九）および「俳句の将来」（一九一三・一）という二篇の評論を掲載している。先に見たように、同年七月号および八月号の「想華俳句」欄には、素琴自身の句作を含めて、「試作」を標榜する実験的な句が掲載されていた。しかしこの評論「本誌俳欄の試作に就て」は、それらの試作についての論評よりも、碧梧桐の句作への攻撃を専らとした文章である。「古文學の價值を認めると共に、新文學の價值をも認めざる得ぬ」と述べた素琴は、その一方で碧梧桐の作風を批判し、「可なり年時が経過して居るに拘らず、一向進歩したらしい迹が認められぬと共に、近頃は唯技巧の末にのみ走つて、多少玩弄的細工的技術を以て誇りとするやうな傾向を現はして来たやうに看取される」と述べている。要するに、この文章を通じて素琴が伝えようとしたのは、碧梧桐のスタイルに走った新傾向の句作はお断りだといふかなり強烈な主張である。

続いて翌一九一三年一月号では、社会情勢・文学・哲学の将来の發展を主題とした特集が組まれ、素琴は「俳句の将来」と題する一文を綴った。この論文で中塚一碧楼より得た手紙の一節を紹介している。素琴が肯定するのは、「主義」というものは「作つた後でその作を見た批評家が便宜のため凡その事を附ける」ことと、「季節趣味はどうしても捨てられぬ」という一碧楼の主張であつ

た。一碧樓の説を重んじる素琴の態度が窺われる。しかし素琴は、碧梧桐の作句態度については「自分の頭腦の遲鈍の爲めかは知らぬが、其句意を模索して居る間に感興の去つて了ふのを常とする」と皮肉り、俳人の間の互評に基づいた自選は個性の抹消に繋がること、「気分を矯めてまで不自然な技巧を弄する」創作態度は「邪路」であることを厳しく指弾した。さらにこの評論でも素琴は、「碧梧桐氏一派の現今の俳調は、多くの點に於いて一般詩界の傾向に逆行するものがある」として、再び碧梧桐を批判の俎上に載せる。素琴はここで、『日本及日本人』で掲載された碧梧桐の句「花に遠く残る桃落葉澄む水に」を取り上げている。この句について、技巧を駆使しようとした結果、「一讀如何に句讀点を施すべきか迷い」、「桃で切つても桃落葉と續けて切つてもよいやうで」あり、却つて句切れの不明瞭さによつて句の意味を混乱させたり、季節感を乱したりすると素琴は論難している。

素琴はこれらの二篇において碧梧桐を手厳しく論難する一方で、大須賀乙字の「俳句界の新傾向」（『アカネ』、一九〇八・二）「日本特有の詩形」（『人生と表現』一九二二・五）を肯定的に引用している。前者は「新傾向」という名称を生み出したことで知られる評論である。ここで素琴は、乙字が提供した「従来に囚はれた季題趣味から現代的の新しい季題趣味に移る」という見通しは「一般詩界の大勢と」は「順行する事」である、と述べている。新傾向が季題趣味をまるごと放棄しようすることへの懸念を、素琴は乙字と共有していたと言える。瓜生敏一によれば、素琴は徐々に一碧樓ら試作一派の行き方に不満を抱き、一九一三年には同派から離れた。素琴自身が新傾向の句を作ったのは、一九一二年か

ら翌年までのごくわずかな期間にすぎない⁽²³⁾。同時期の百間の句作を捉える上で、素琴が演じたこのような動搖は無視できない。百間の新傾向に対する態度はきわめて曖昧なものだが、その曖昧さは、師である素琴における新傾向への参与と離脱が遠因となっていると考えられる。

以上のように、『東亜之光』は、内田百間の句作を含む最初期の掲載媒体となった雑誌である。六高の最後の数ヶ月から文科大を卒業するまで、本誌は百間にとつて『六高校友會誌』、『日本及日本人』と並び密接な関係のあつた媒体であると言える。『東亜之光』に掲載された句作には、初期の「一夜会」「苦渋会」の句集にも拾われなかったものが含まれている、六高卒業後から、百間は試作を気軽に披露できる媒体として本誌を活用していたことが窺える。また百間は本誌を通して、心靈研究、ドイツ文学や哲学のほかに、新傾向の諸家に対する素琴の態度に触れることができた。『東亜之光』は百間にとって、青年時代の教養の母胎となつた媒体として重要な意味を持つのである。

*表記につき、引用文・作品名・著作タイトルを除き旧字を新字に改めた。

注

- (1) 高橋義孝「解題」『内田百間全集』第一巻、講談社、一九七一・一〇。
- (2) 坂口周『意志薄弱の文学史——現代日本近代文学の起源』慶應義塾大学出版会、二〇一六・一〇、一八一頁。

- (3) 福来友吉「精神可能性と人格」『東亜之光』一九二〇・九。
- (4) 松原大介「内田百閒「山東京伝」における典拠——「京伝」・「小さい人」・「山蟻」をつなぐもの」『日本文学』二〇二二・二二。
- (5) 野口武彦「夢の弟子入り」『新輯内田百閒全集』第二十四巻月報、一九八八・一〇。
- (6) 「桜姫全伝曙草紙」の巻末には「朱子読書九」の広告文として、「氣こんを強よくし物おほえをよくす 心腎のきよそんによしきのかたぶらぶらわづらひによし うまれつきてよわき人用いてよし」といった文言が記載されている。〔新日本古典籍総合データベース〕https://kotenski.nijac.jp/biblio/100307182_viewer/153 (最終閲覧二〇二三年一月一〇日)
- (7) 杉山亮「東亜協会について——1906—1929年」『法学会雑誌』二〇一九・七。
- (8) 荒川大輝「井上哲次郎による雑誌『東亜之光』の創刊」『日本史學集録』二〇一七・七。
- (9) 荒川大輝「井上哲次郎による雑誌『東亜之光』の創刊」、前掲。
- (10) 吉永進「日本の心霊研究と精神療法」特別展 奇なるものへの挑戦——明治大正／異端の科学 岐阜博物館・二〇一四・七↓栗田英彦編『日本心霊学会』研究—靈術団体から學術出版への道—人文書院、二〇二二・一〇。
- (11) 浅野和三郎（一八七四—一九三七）は、文学士で英文学者であり、東京帝国大学英文学科を卒業後、横須賀海軍機関学校で教鞭をとる。心霊研究に傾倒し、さらに出口王仁三郎の「帰神法」に衝撃を受け大本教に入信する。弾圧事件で教団を離れたのち、自ら「心霊科学研究会」を創立した。松本健一「神の毘—浅野和三郎 近代知性の悲劇」（新潮社、一九八九・一〇）を参照。
- (12) 「内田榮進」は「内田榮造」の誤記であると考えられる。卒業論文のテーマに関して、『新輯内田百閒全集』（福武書店、一九八九・一〇）の年譜では「ゾーデルマンのフラウ・ゾルゲについて」とある。
- (13) 現在流通している『憂愁夫人』の訳本は、一九三八年五月に岩波書店によって出版され、相良守峯が訳したものである。なお、一九五七年四月に改版を経たものが最も手に入りやすい。
- (14) 相良守峯「解説」『憂愁夫人』、前掲。
- (15) 山本一生「百閒、まだ死なざるや——内田百閒伝」中央公論新杜・二〇二二・六、一二三頁。
- (16) 内田百閒「駒込曙町」『東炎』、一九三四・九—一〇。一九一五年二月に書かれた「筐底穉稿」が収録される。
- (17) 内田百閒「青木先生」（旧題「青木先生の教訓」）『帝大独逸文学』一九三九・五。『新輯内田百閒全集』第九巻、福武書店、一九八七・九。
- (18) 井本農一「随想 志田素琴と内田百閒」『俳句研究』、一九九三・一一。
- (19) 瓜生敏一「『試作』『第一作』と志田素琴」『国語と国文学』一九六一・五。
- (20) 内田百閒「百鬼園俳談義」、『鬼苑横談』新潮社、一九三九・一↓「新輯、内田百閒全集」第八巻、福武書店、一九八八・四。
- (21) 瓜生敏一「『試作』『第一作』と志田素琴」前掲。
- (22) 素琴はここで乙字の「日本特有の詩形」（『人生と表現』一九一二・五）を引用しているが、「俳句＝詩」という構図は後年の百閒にも継承されている。
- (23) 瓜生敏一「『試作』『第一作』と志田素琴」前掲。

（しゅ） しか／神戸大学大学院人文学部研究科博士課程後期課程